

1. 開催概要

展覧会名	台北 國立故宮博物院—神品至宝—	
開催施設名	会期	入場者数
東京国立博物館	2014年6月24日～9月15日	約40万人
九州国立博物館	2014年10月7日～11月30日	約26万人
<p>●開催概要</p> <p>中国歴代にわたる優れた文化財を多数収蔵している台北國立故宮博物院の約70万点の中から、門外不出とされていた「翠玉白菜」や「肉形石」のほか、最高水準の宋・元の絵画、書、青磁の最高峰とされる北宋・汝窯4点を含む特に代表的な作品延べ231件を厳選、日本文化の淵源となった中国文化の特質や素晴らしさを広く伝えた。本格的な台北故宮展はアジアで初めて。</p> <p>開幕時、東京では約1500人、九州では約300人が列を作って入場を待つなど、世間の関心を集めた。また、台湾の馬英九総統は「(日台間の)文化交流に重要な意義がある」(5月31日、読売新聞)と述べた。台湾南部に2015年末に開館予定の「故宮博物院南分院」で、翌2016年末から開かれる日本美術展に、東京国立博物館、九州国立博物館は、計約150点の美術品を提供する予定であり、日台交流の発展にも大いに寄与した。</p>		

2. 美術品補償制度の活用による国民的利益に関する取組結果

<p>以下のとおり国民的利益の還元積極的に取り組んだ。</p> <p>■展示作品の質・量の充実</p> <p>中国歴代にわたる優れた文化財を多数収蔵する台北國立故宮博物院の収蔵品によるアジア初の本格的な展覧会が実現できた。最高水準の宋・元の絵画、書、青磁の最高峰とされる北宋・汝窯4点を含む特に代表的な作品に加え、門外不出とされてきた「翠玉白菜」や「肉形石」が出品されるなど、これまで台北故宮が行ってきた海外展の中でも最高水準の内容となった。</p> <p>■快適な鑑賞環境の維持と鑑賞機会の拡大</p> <p>作品の安全と来場者の快適な鑑賞環境を維持するため、通常実施している金曜日に加え、東京展、九州展とも、目玉作品の「翠玉白菜」「肉形石」展示期間中は、休館日を設けず、東京国立博物館では、開館時間の夜間延長を実施した。また補償制度を活用し、警備・誘導などのスタッフ経費を捻出、より広範な国民に鑑賞機会を提供した。</p> <p>■教育普及活動の充実</p> <p>台北國立故宮博物院の学芸員を招聘して、東京国立博物館、九州国立博物館で2回の国際シンポジウムを開催した。詳細は以下の通り。</p> <p><「中国皇帝コレクションの意味」—書画における復古と革新—> 【日程】2014年7月5日(土)～2014年7月6日(日)</p>
--

【会場】東京国立博物館平成館大講堂

7月5日(土)

開幕の辞 銭谷眞美(東京国立博物館長)

開幕メッセージ 馮明珠(國立故宮博物院院長)代読

<基調講演>「國立故宮博物院書画コレクションの淵源」何傳馨(國立故宮博物院副院長)

◆セッション1 唐から宋へ、中国から日本へ

「王羲之と小野道風」丸山猶計(九州国立博物館)

「蘇軾「寒食帖」と米芾「草聖帖」—台北と大阪を結ぶ縁」弓野隆之(大阪市立美術館)

「徽宗と義満—日本における皇帝コレクションの意味—」畑靖紀(九州国立博物館)

「皇帝コレクションにおける模写・模造事業—乾隆帝の書画コレクションと狩野派—」塚本磨充(東京国立博物館)

7月6日(日)

◆セッション2 元代書画の世界

「元末四大家—文人画の確立—」湊信幸(東京国立博物館客員研究員)

「公主の雅集:モンゴル皇室と書画鑑蔵活動」陳韻如(國立故宮博物院)

「乾隆帝が見た江南山水画—伝巨然「蕭翼賺蘭亭図」を中心に—」竹浪遠(黒川古文化研究所)

◆セッション3 乾隆帝の書画コレクション

「乾隆帝と澄心堂紙」何炎泉(國立故宮博物院)

「徽宗の7璽と乾隆帝の8璽について」富田淳(東京国立博物館)

総合討論

司会:何傳馨(國立故宮博物院副院長)、湊信幸(東京国立博物館客員研究員)

◆閉会の辞 島谷弘幸(東京国立博物館副館長)

<中国皇帝コレクションの意味 — 工芸における復古と革新—>

【日程】2014年10月25日(土)

【会場】九州国立博物館 ミュージアムホール

総合司会:井上洋一(九州国立博物館学芸部長)

開会の辞 三輪嘉六(九州国立博物館長)

開会メッセージ 馮明珠(國立故宮博物院院長)※代読

<講演>「國立故宮博物院の名品から見た清朝皇帝コレクション」蔡玫芬(國立故宮博物院器物処長)

◆セッション1

「陶磁器と漆」司会:市元壘(九州国立博物館)

「乾隆帝收藏の汝窯磁器と関連する諸問題」余佩瑾(國立故宮博物院器物処副長)

「日本でつくられた倣中国製彫漆器」川畑憲子(九州国立博物館)

◆セッション2

「玉器と青銅」司会:市元壘(九州国立博物館)

「乾隆帝の玉器評価基準」張麗端(國立故宮博物院器物処科長)

「考古資料から見た徽宗の青銅器文化復興」谷豊信(東京国立博物館)

◆総合討議

司会:谷豊信(東京国立博物館)

発表者:市元壘(九州国立博物館)

◆閉会挨拶 大西浩二(九州国立博物館副館長)

■広報活動の充実

本展の開催を広く周知することにより、より多くの国民に、優れた美術品を鑑賞する機会を提供した。

■入場料の無料化・軽減

高校生(東京展)、高校・大学生、小・中学生(九州展)入場料を軽減した。

東京国立博物館→高校生の入場料軽減 900円→700円

小・中学生 無料

九州国立博物館→高校・大学生の入場料軽減 1000円→900円

小・中学生の入場料軽減 600円→400円

■小中学生向けガイドブックの作成および無料配付

出陳作品の見どころや素晴らしさ、台北故宮の収蔵品の性格を分かりやすく伝えるために、小中学生向けのガイドブックを作成し、無料配付した。

3. 事故の有無(軽微な事故、ヒヤリハット事例も含む)

ヒヤリハット事例も含め、事故はまったくなかった。

4. 安全配慮に関する特別の対応

所蔵者や関係者と十分に協議し、陸送時の民間警備車による警護を含め、万全の体制で輸送・展示作業にあたった。

また、入場者数の増加に対応して迅速に誘導スタッフを増員し、過度な混雑が展示室内外で生じないように誘導を工夫したほか、通常よりも強度の高い結界に交換するなど、作品と入場者の安全確保に努めた。

5. 紹介事例・今後の改善点等

本制度の適用によって、国歴代にわたる優れた文化財を多数収蔵している台北国立故宮博物院の収蔵品によるアジア初の本格的な展覧会が実現した。最高水準の宋・元の絵画、書、青磁の最高峰とされる北宋・汝窯 4 点を含む特に代表的な作品に加え、門外不出とされてきた「翠玉白菜」や「肉形石」が出品されるなど、これまで台北故宮が行ってきた海外展の中でも最高水準にできたことは、「広く国民にすぐれた美術品鑑賞の機会を提供する」という本制度の趣旨に合致したものであったと自負する。

本制度の適用については、チラシや展覧会ホームページで広く告知したほか、展覧会会場入口や公式カタログにも記載することで、来場者に対して制度の適用を強くアピールした。

6. 展覧会の収支決算書

東京国立博物館、九州国立博物館ほか

(収入)		(支出)		単位:万円
展覧会収入・その他収入	112,637	企画準備等基本経費 注)		27,904
主催社負担	91	設営・運営等会場関係経費		84,824
収入総額	112,728	支出総額		112,728

注)美術品保険料は補償制度の導入等により、当初総定額よりも、約1278万円、軽減された。